

2026年3月8日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教74「互いに愛し合いなさい」

ホセア6：4～6、ヨハネ13：31～35

今日はヨハネによる福音書第13章31～35節のところが与えられております。幾つかの注解書が記しているのは、ここからイエスさまの説教が始まるということです。イエスさまが十字架の死を前にして弟子たちに最後の説教をなさった。それは言わば遺言のようなものです。ですから「告別説教」「訣別説教」とも言われます。皆さんは遺言を書く経験があるでしょうか。教会でも「葬儀に関する希望」を提出していただくようにしています。しかしそれらはある種、形式的なことで、本当に伝えたいことはもっと他にあるかもしれません。それは感謝や、家族がいつまでも仲良く助け合っていてほしいという願いかもしれません。

イエスさまの告別説教も「互いに愛し合いなさい」という教えから始まります。「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(34節) ユダが出て行き、ペトロもイエスさまを否定する。イエスさまは、この後、弟子たちが散り散りに逃げ去ってしまうことをご存知です。その弟子たちがこれからどうしたらまた一つになることができるのか。何とか一つになってほしい。その切なる願いがここにあります。

ここに「新しい掟」とあります。それが互いに愛し合うことですが、しかし愛するということとは聖書においてはすでに教えられてきたことでもあります。旧約聖書には、申命記の第6章に「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」(6：5)という教えがあります。またレビ記にも「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」(19：18)とある。イエスさまはここから神さまを愛すること、隣人を愛することを律法の要約であると教えておられます。では、ここでイエスさまが言われる「新しさ」とは何でしょうか。

イエスさまは、ただここで「互いに愛し合いなさい」と教えられたのではありません。「わたしがあなたがたを愛したように」と付け加えられます。ここではイエスさまの先行する愛が言われています。まずイエスさまが弟子たちを深く愛されました。イエスさまが弟子たちの足を洗われたとき「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」(13：1)とあります。そして「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示した」(13：15)と言われます。イエスさまはここで新しい愛の模範を示されたのです。

模範(ヒュポデイグマ)という言葉は、手本、型を意味する言葉です。今日のところに「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」(35節)とありました。人がその互いに愛し合う様を見て、「あれはイエスさまの弟子だ」と分かるということです。師と弟子の関係がここにあります。お茶でもお花でも様々な流派があることは皆さんもご存知でしょう。師匠にならい、その流派の型を我が身に落とし込むのです。そうすると師と弟子が一つになる。弟子の作法を見れば、「ああ、あの先生の弟子だ」と分かる。牧師と教会員が似てくるということがあります。例えば、祈りが似てくる。いつも耳にしていると自然と身についてくるのでしょうか。そのようにイエスさまを師としている弟子のわたしたちもまたイエスさまに似てくる。イエスさまのように行う、イエスさまのように愛することが

できる。それはイエスさまの型に合わせられるからです。それは理屈や頭で考えてできることではなくて体験だと思います。それは洗礼を受けてイエスさまと一つになること。そのようにして愛の模範、型がわたしたちに現れてくるのです。

ここで忘れてはいけないのは、元々わたしたちは「神のかたち」に造られているということです。教会の教理の言葉では「イマゴ・デイ」と言います。人間は神さまのイマゴ（イメージ）に造られています。しかしアダムとエバ以来、人間は罪を犯して、そのかたちを壊してしまいました。だから愛に生きることができません。けれどもイエスさまによってわたしたちは再びそのかたちを取り戻すのです。「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださる」（フィリピ3：21）イエスさまは十字架で死なれ、三日目によみがえられます。そこに栄光ある体があります。それは罪に勝利し、新しい命へと呼び覚まされた体です。洗礼を受けてイエスさまに結ばれることで、わたしたちはイエスさまの体と同じ形に変えられていく。それは神のかたちの回復であり、本来の祝福された人間の姿、それは天地創造の時に「極めて良かった」（創世記1：31）と言われた人間に回復されることに他なりません。

冒頭に「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる」（31～32節）とありました。ここは一言で言えば、父なる神さまとイエスさまが一つであるという信仰です。洗礼を受けたわたしたちはイエスさまと一つになります。それゆえに今日のところでイエスさまは弟子たちに「子たちよ」と呼びかけられます（33節）。それはイエスさまによって神さまのかたちを取り戻し、神の子とされたからです。わたしたちがイエスさまと結ばれ一つであれば、わたしたちは神さまともつながる。神さまとも一つになる。それは決して人間が神さまになるということではなく、神のかたちを取り戻し、神さまの子とされることです。そのことによってわたしたちは愛の源泉を持ち、愛に生きることができるのです。それがイエスさまが言われる「新しい掟」の新しさなのでしょう。

先ほど、多くの人の愛が冷える冬の時代に入ったと申しました。戦争が至るところで起こり、憎しみがまた新たな憎しみを生み出す悲惨な現実があります。しかし人間は神さまのかたちという愛の原石を持っています。しかし原石のままでは輝きはありません。自分の中だけに留めてしまうようなものです。わたしたちの中に神のかたちが回復され、その愛が輝きを放つためにこそ、イエスさまは十字架で死んでくださり三日目によみがえってくださいました。御自身の命をもって、その試練を通して、この原石に磨きをかけてくださいました。すでにわたしの中で神さまの愛が輝き始めています。

天の父よ。互いに愛し合いなさいとの戒めを生きるように招かれています。もちろんわたしたちの力では愛することはできません。イエスさまに結ばれて、神さまの愛に押し出されてこそ、愛に生きることができます。十字架に示された神さまの愛を受け取ることができますように。戦禍に苦しむ人々、災害に苦しむ人々に、今日も愛の業が行き届きますように。主の御名によって祈ります。アーメン。